



柿野浦と共に

1996年に移転、翌97年からは2年制の研修所としてスタートした柿野浦の研修所。この学び舎を巣立った研修生、88名。2年制のカリキュラムを修了した人は76名。この数の若者を集落の皆さんは温かく見守り、応援してきてくださったのです。懐かしい方々と再会を果たしに、今でも祭りの日に帰ってくる卒業生がいます。研修生にとって、そんな第二の故郷となる柿野浦についてお伝えします。



脱穀機の具合を見てもらう



わら草履づくりを習う



防火訓練



島・周辺部の集落

柿野浦は、両津港から海岸線を車で四〇分南下した前浜地区の集落で戸数二〇軒あまり。現在の佐渡では、島の中央部に企業・人口が集中し、周辺部では過疎化、高齢化が進行しています。地域の学校も統廃合が進み、必然的に子供は実家を離れ、学校のある中央部の国仲地区に下宿することもあるのです。一家の働き手のお父さんは、通勤や子供の学校のことも考え合わせて、生活し易い国仲地区に家を持つ場合もあります。そういう流れの中にある島の周辺部、そこで生活しているのは主におじいちゃん、おばあちゃん。平日はひっそりと穏やかな村の風景が広がります。

若者来る

そんな集落の一つ、柿野浦に私達が住まわせていたようになったのは一九九六年四月、今年で十三年目になりました。一九九五年三月に廃校になった旧岩首中学校は、鼓童のスタッフ・山中津久美の母校です。昭和二六年に完成した学校は、集落の皆さんが力を合わせ、材木や瓦を山の上まで運んで建てたものです。学び舎を跡地の石碑だけにするのは忍びなく、どうか研修所としてお借りすることはできないかと働きかけ、取り壊しの予算分を道の整備に当てることで当時の両津市とは交渉成立。しかし、柿野浦の皆さんにとっては、どうだったでしょう。

「最初はやっぱり、そんな若い人たちが一気に来て、寝泊まりして大丈夫かという意見もあつたね。学校は集落から一キロも上がった所にあるし、どんな生活をしようというの心配だ。それで、大井さん（大井良明・当時の研修所長）は何度も何度も足を運んで話をしに来てくれて

大変だったと思うよ。（当時の区長の奥様・小川さん）」

どうなるか分からないながらも、間をおかずG〇サインを出してくださった柿野浦の皆さんに改めて感謝の気持ちが湧いてきます。使わなくなったら取り壊すだけなので、長く居てくれ、という気持ちをいただいて三〇年契約を取り交わしました。建物が朽ちる時間を与えずに、内部の改修もまた柿野浦の方々にお世話になりながら一年後には「鼓童研修所」としてスタートしたのです。

家族がわりの温かさ

それまでの研修所では舞台の演目稽古に終始する内容でした。しかし、一九九七年から二年制にし柿野浦に定着することで、舞台人の魅力として必要な、人間の本来の暮らしを知るという目標が現実のものとなりました。おじいちゃんやおばあちゃんから様々な作業を通して、目を見張るような驚きである生活の知恵・工夫・美を学びます。集落の安泰を願う祭りでは、鬼太鼓を習い、芸そのものや人と人の繋がり、熱いものを感じます。また、毎年二年生が行う自由研究で柿野浦に関することをテーマにした者は、研究にあてられた時間や休みの日にそれぞれのお宅に通い、様々なことを伺い、生きたレポートをまとめました。（柿野浦の鬼太鼓について・集落の歴史・昭和三六年の大火について・川嶋さんという戦争体験者の方の聞き書き・テゴという藁のバック作りの実体験など）そこには若者が尊敬を持って年配の方からお話を聞く、といった心の交流がありました。

その他、皆さんにお世話になること数知れず。野菜が玄関先に置いてあったり、朝のランニングで声をかけてもらったり、水道や電気の不都合を解消してもらったり、お宅におじゃまして悩み

相談をし、本当の家族のような親身な言葉をかけてもらって救われる…。

「本当に研修生がいてくれて何もかもが助かっているよ。今暮らしているのは七〇歳で若いほうだしね。春秋の道づくり（道路まわりの大掃除・整備や鬼太鼓祭りの神社の幟立てだつて年寄りだけではできないもの。それからお盆に催す夏祭り。いつもいっぱい帰省してくるけれど、アース・セレブレーションと重なって研修生に参加してもらえないような年は、今年はやめておく、と帰って来ない人もいるくらい。今やもうみんなが、若い人がここに居てくれるというのが楽しみなの。でも、人が集まる場所だつた農協が無くなってからは、研修生と毎日顔を合わせる事が無くなって少し淋しいねえ。（小川さん）」

集落のあり方に正解などないでしょう。十三年の間には、集落を離れた人もいるし、都会からUターンして来た方もいます。私達が、年配の方々との繋がりを今ひとたび積極的にし、充実した生活を継いでいくことが集落の今後にも関わります。昨今言われるようになった限界集落という言葉など越えた将来を思いつつ：柿野浦よ、いつまでも！ 皆さん、住民としてこれからも私達をどうぞよろしくお願いいたします。（文：千田倫子）

◆柿野浦住民として参加の行事

- 四月：二週間、神社にて鬼太鼓の稽古／祭り／春の道づくり／研修所での花見
- 五月：ロングライドボランティア
- 八月：夏祭り／秋の道づくり
- 九月：トライアスロンボランティア
- 十月：柿野浦・大火の日の防災訓練
- 十一月：研修所収穫祭主催
- 二〇〇七～八年：消防団班長（所長・石原泰彦）

研修所講師の先生方（敬称略）

- 佐藤利夫 「講義」 佐渡研究者
- 福島徹夫 「講義」 元・新潟県栽培 漁業センター所長
- 桃井宗生 「茶道」 裏千家学校茶道教授
- 松永政雄 「能」 宝生流教授囃託 幸清流小鼓準職分
- 小笠原匡 「狂言」 能楽師和泉流狂言方
- 金城光枝 「琉球舞踊」 琉球舞踊家 太主流華の会師範
- 岩手県盛岡市黒川さんと踊り保存会 「黒川さんさ踊り」
- 岡田京子 「歌」 作曲家
- 伊藤多喜雄 「唄」 民謡歌手
- 赤塚五行 「俳句」 新潟日報佐渡版俳句選者
- 熊田勝博 「講義」 照明家
- 葛原正巳 「陶芸」
- 西須狗治 「木工」 指物師
- 岩崎ちひろ 「魚のさばき方」 魚屋
- 松田祐樹 「講義」 佐渡の芸能研究者
- 狩野泰一 「笛」 篠笛奏者
- 金子竜太郎 「太鼓など」 和太鼓奏者

鼓童メンバー講師

- 内容／太鼓、踊り、唄、笛、身体ケア、農作業、造形、講義、生活全般など
- 講師／大井良明、藤本吉利、小島千絵子、藤本容子、大井キヨ子、山口幹文、齊藤栄、見留弘弘、新井武志、（補佐）辻勝、船橋裕郎、砂畑好江、阿部研三、青木孝夫、菅野敦司、山口康子、千田倫子、石原泰彦、後藤美奈子、松浦充長